

平成 29 年度

赤い羽根福祉基金 助成事業

地域共生社会の創造に向けた コミュニティソーシャルワーカー 養成研修の基盤構築事業

報告書

社会を良くするたしかな一歩



赤い羽根
福祉基金

平成 30 年 3 月

一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟

はじめに

本報告書は、社会福祉法人中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」の助成により一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟が実施した「地域共生社会の創造に向けたコミュニティソーシャルワーカー養成研修の基盤構築事業」の2ヶ年度目（3ヶ年計画）の成果をまとめたものである。

本年度は、初年度の研究成果をもとに、研修プログラムの検討と共通テキストの作成に向けた検討を行い、試行的に全国3会場（京都・東京・愛知）で「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修（コソ研）」を実施した。本研修には、社会福祉協議会、地域包括支援センター、医療機関、行政など様々な立場で日々、ソーシャルワーカーとして実践している方々に参加いただいた。

また、研修の実施にあたっては、全国社会福祉協議会、都道府県・市区町村社会福祉協議会や日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会にも協力を依頼した。

地域共生社会の実現に向け、あらゆる制度・政策の立案や実行のための具体的な検討がなされている中、ソーシャルワーカーへの期待が高まってきている。個人・家庭が抱えている複雑かつ複合的な課題に対して、制度の枠にとらわれずに分野横断的に支援を行う必要がある。本研修では、個別支援にとどまらず、地域やコミュニティへも視野を広げた支援が行えるよう、必要となる視点や知識、技術等について学べる内容になるよう、工夫を行った。

また、実践力の高いソーシャルワーカーを養成・育成していくために、養成段階から本研修の内容を習得することができるよう、養成カリキュラムに落とし込むことも意識しながら継続して検討をしていきたいと考えているところである。

本事業の実施にあたって協力をいただいた養成校や専門職団体、関係団体等に深く感謝申し上げますとともに、引き続き、本事業へのご協力をお願い申し上げます次第である。

日本ソーシャルワーク教育学校連盟

会 長 白 澤 政 和

目 次

I. 事業概要

1. 背景と目的	7
2. 事業計画	8
3. 実施体制	9

II. 平成 29 年度事業報告

1. 委員会	13
2. 研修概要	15
3. 事業実績	22

III. まとめ（次年度に向けて）

1. 本年度の成果	35
2. 次年度の検討内容とスケジュール	36

IV. 参考資料

各種様式（アンケート・事前課題・事後課題）	39
研修プログラム	44

I . 事業概要

1. 背景と目的

平成 27（2015）年、厚生労働省が公表した「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」（以下、「新福祉ビジョン」）を皮切りに、平成 28（2016）年 6 月に閣議決定された「一億総活躍プラン」に基づき、厚生労働省に「我が事・丸ごと地域共生社会実現本部」が設置された。その後「地域における住民主体の課題解決力強化・相談支援体制の在り方に関する検討会」（地域力強化検討会）が立ち上がり、平成 28（2016）年 12 月に中間とりまとめ、平成 29（2017）年 9 月に最終とりまとめが公表された。これらのとりまとめに基づいて社会福祉法の改正や地域共生社会の実現に向けた地域福祉の推進について通知が発出されている。

また、ソーシャルワーク専門職である社会福祉士のあり方については、平成 28（2016）年 10 月より、厚生労働省社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会において検討が行われ、平成 29（2018）年 3 月 27 日に報告書「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」が公表されたところである。

本連盟では、国の動向や今日的な福祉施策や支援ニーズの状況等を踏まえ、社会福祉士養成教育内容の見直しに向けた検討を開始しているが、地域における包括的な支援を担うソーシャルワーカーの実践力を強化するためには、養成段階で地域を基盤とした支援に関する知識や技術レベルを高めるとともに、資格取得後の継続的な研修機会を確保する必要性があることを提言している。

平成 24（2012）年のコミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW とする）に関する調査*によると、全国の都道府県及び指定都市の社会福祉協議会のうち、都道府県社協では 9 社協が、指定都市では 23 社協が CSW 養成研修を実施していないと回答しており、地域共生社会の実現にむけた取り組みを全国で隈無く展開するためにも、すべての都道府県等において地域を基盤としたソーシャルワークが展開できる人材が養成され、実践力の強化・充実とともに人材の継続的な量確保も図っていく必要がある。

そのためには、社会福祉協議会が有している実践に関する知見・組織力・人材養成機能・実践フィールドと本連盟や地域福祉学会が有している教育・研究者・学生・学校施設等、そして専門職団体が有している知見等、様々な資源を合わせ、「コミュニティに強いソーシャルワーカー」の養成研修の共通・標準化や実施体制基盤を構築していく必要がある。

本事業は、既存の研修の内容に関する調査・研究を行い、共通テキストの開発と全国で展開できる研修実施体制の基盤を確立するとともに、それらの内容を社会福祉士等ソーシャルワーカー養成教育にフィードバックし、いわば産・学が連携した「コミュニティに強いソーシャルワーカー」の人材養成の好循環モデルを構築することを目的に実施するものである。

*「コミュニティソーシャルワーカー（地域福祉コーディネーター）調査研究事業報告書」（野村総合研究所，平成 25 年 3 月）

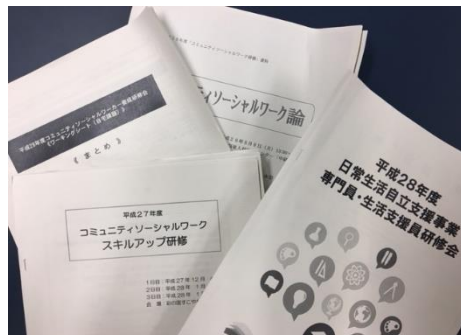
2. 事業計画

本事業は平成 28 年度～平成 30 年度までの 3 ヶ年で計画している。

<平成 28 年度（1 年目）>

- 地域を基盤としたソーシャルワークに関する文献や、すでに都道府県社協などで実施している研修に関するプログラム等の資料を収集し、内容の検証を行った。

そして、今日的状況を踏まえた研修内容に含むべき事項を整理し、新たな研修プログラムに含めるべき事項について検討を行った。



- 先駆的に取り組んでいる社会福祉協議会等にヒアリングを行い、新たな研修プログラムの妥当性について検証を行った。

<平成 29 年度（2 年目）>

- 前年度の成果を踏まえ、研修プログラムの成案を作成し、プログラム内容に対応させた研修テキストを作成した。研修テキストは、本事業の連携・協力団体と共通で使用できる教材となるよう、留意した。

- 「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修（コソ研）」の全国展開に向け、試行研修を全国 3 ブロック（京都・東京・愛知）で実施した。



<平成 30 年度（3 年目）※予定>

- 前年度に試行研修を実施していないブロックで、「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修（コソ研）」を実施する。
- 前年度の研修内容や検討事項を踏まえて、共通テキスト及び研修プログラムを確定させる。
- 研修内容および実施体制に関する総括を行い、今後の養成研修のあり方について検討を行う。

3. 実施体制

本事業は、事業委員会の下に2つのチームを構成し、検討を行った。

1) 事業委員会（TEAM★コソ研）

No.		氏名	所属
1	委員長	原田 正樹	日本福祉大学教授／日本福祉教育・ボランティア学習学会会長
2	副委員長	中島 修	文京学院大学准教授
3	副委員長	空閑 浩人	同志社大学教授／本連盟事業運営委員
4	委員	平井 庸元	全国社会福祉協議会地域福祉部副部長
5	委員	勝部 麗子	豊中市社会福祉協議会福祉推進室長
6	委員	谷口 郁美	滋賀県社会福祉協議会事務局次長
7	委員	加山 弾	東洋大学准教授
8	委員	藤井 博志	関西学院大学教授
9	委員	野村 裕美	同志社大学准教授
10	委員	所 めぐみ	関西大学教授
11	委員	竹田 匡	日本社会福祉士会理事／釧路町地域包括支援センター
12	委員	松本 すみ子	日本精神保健福祉士協会理事／東京国際大学教授
13	委員	坂本 智代枝	大正大学教授
14	委員	川井 太加子	桃山学院大学教授
15	顧問	上野谷 加代子	同志社大学教授／本連盟副会長
16	顧問	中谷 陽明	松山大学教授／本連盟相談役
17	協力員	渡辺 裕一	武蔵野大学教授／日本地域福祉学会事務局参与
18	協力員	川井 誉久	東京都社会福祉協議会地域福祉部部長
19	協力員	荻田 藍子	兵庫県社会福祉協議会社会福祉研修副部長
20	事務局	小森 敦	本連盟事務局長
21	事務局	木下 めぐみ	本連盟企画係長

2) プログラム検討班

- ・研修プログラムの骨子等の検討を行う

No.		氏名	所属
1	リーダー	藤井 博志	関西学院大学教授
2	委員	空閑 浩人	同志社大学教授／本連盟事業運営委員
3	委員	加山 弾	東洋大学准教授
4	委員	所 めぐみ	関西大学教授
5	委員	坂本 智代枝	大正大学教授
6	委員	川井 太加子	桃山学院大学教授
7	委員	渡辺 裕一	武蔵野大学教授／日本地域福祉学会事務局参与
8	委員	川井 誉久	東京都社会福祉協議会地域福祉部部長
9	委員	荻田 藍子	兵庫県社会福祉協議会社会福祉研修副部長

3) 研修体制班

- ・研修実施に向け、講師や会場の調整などを行う

No.		氏名	所属
1	リーダー	中島 修	文京学院大学准教授
2	委員	平井 庸元	全国社会福祉協議会地域福祉部副部長
3	委員	谷口 郁美	滋賀県社会福祉協議会事務局次長
4	委員	加山 弾	東洋大学准教授
5	委員	竹田 匡	日本社会福祉士会理事／釧路町地域包括支援センター
6	委員	松本 すみ子	日本精神保健福祉士協会理事／東京国際大学教授
7	委員	渡辺 裕一	武蔵野大学教授／日本地域福祉学会事務局参与

Ⅱ．平成 29 年度事業報告

1. 委員会

事業委員会を4回、プログラム検討班を3回、コアメンバーの打ち合わせを2回開催し、以下の内容について検討を行った。

1) 委員会開催日程

① 事業委員会

	日にち	時間	場所	参加者
1	平成 29 年 5 月 21 日（日）	17：00～19：00	本連盟研修室	16 名
2	平成 29 年 7 月 16 日（日）	17：30～19：00	本連盟研修室	18 名
3	平成 29 年 9 月 5 日（火）	10：00～17：00	同志社大学今出川キャンパス	13 名
4	平成 30 年 3 月 31 日（日）	9：00～12：00	日本福祉大学名古屋キャンパス	<u>15 名</u>

■ 検討内容 ■

<第1回>

- ・研修プログラムとテキストについて
- ・研修申込、広報等について

<第2回>

- ・研修プログラムについて
- ・研修担当者について
- ・研修資料について
- ・研修申込、広報等について

<第3回>

- ・プレ研修の実施

<第4回>

- ・本年度の振り返り
- ・今後の方向性と実施計画について



② プログラム検討班

	日にち	時間	場所	参加者
1	平成 29 年 4 月 23 日 (日)	14 : 00～17 : 00	新大阪セミナーオフィス	9 名
2	平成 29 年 5 月 21 日 (日)	14 : 00～16 : 30	本連盟研修室	9 名
3	平成 29 年 7 月 16 日 (日)	13 : 30～17 : 00	本連盟研修室	13 名

■ 検討内容 ■

<第 1 回>

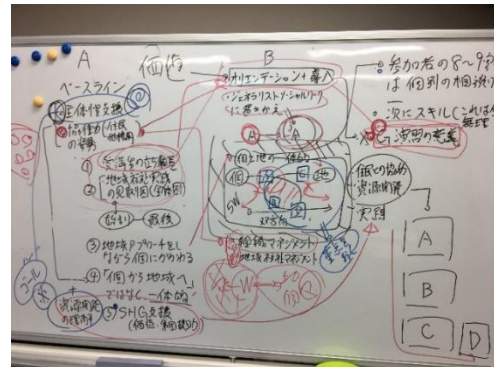
- ・ 研修プログラムの検討について
(単元抽出・確定、時間設定、講義方法、
研修運営等)

<第 2 回>

- ・ プログラム作成について

<第 3 回>

- ・ プログラム作成について



③ コアメンバー打ち合わせ

	日にち	時間	場所	参加者
1	平成 29 年 11 月 11 日 (土)	10 : 00～12 : 00	東洋大学白山キャンパス	7 名
2	平成 29 年 12 月 24 日 (日)	14 : 00～15 : 00	本連盟研修室	4 名

■ 検討内容 ■

<第 1 回>

- ・ 東京会場の進め方について

<第 2 回>

- ・ 愛知会場の進め方について



2. 研修概要

1) 研修名

「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修」（コソ研）

2) 開催日程

	日程	会場
1	平成 29 年 10 月 14 日（土）・15 日（日）	同志社大学今出川キャンパス（京都市）
2	平成 29 年 11 月 25 日（土）・26 日（日）	本連盟研修室（東京都港区）
3	平成 30 年 2 月 24 日（土）・25 日（日）	日本福祉大学東海キャンパス（愛知県東海市）

3) 研修の目標とねらい

- ソーシャルワークにおけるミクロ・メゾ・マクロの視点を身につけ、自らの日頃の実践の中からそれらの視点を見出す
- 地域住民を主体とした地域づくりへのアプローチに向けた地域生活課題の把握などの基本的な知識・視点を習得する

4) 定員と受講料

- 定員：各会場 100 名程度
- 受講料：10,000 円（テキスト代込み）

5) 受講対象者

- 社会福祉士・精神保健福祉士国家資格取得後、社会福祉分野での実務経験 5 年前後の者
- ・「実務経験 5 年前後」とは、前後 2 年（3～7 年程度）まで含む
 - ・「社会福祉分野」には、高齢・児童・障害・医療・地域等に加え、学校・司法・生活困窮者・ひきこもり・まちづくり・マイノリティ・外国人等への支援も含む

6) 研修プログラム

		単元名
1 日 目	1	ソーシャルワークとは
	2	コミュニティ（地域）とは何か、そこで暮らすとはどういうことか
	3	コミュニティに対するソーシャルワーカーのアセスメントとは
2 日 目	4	地域を基盤としたソーシャルワークの全体像
	5	ネットワークと社会資源
	6	「コミュニティに強い」ソーシャルワーカーになるために必要な力（まとめ）

7) 研修内容・講師

■単元1 ■「ソーシャルワークとは」

時間数	105 分
単元の目標	・ソーシャルワークとは何かを学ぶ ・ソーシャルワーカーとは何を見て、何を考えて、何をする人なのかを学ぶ ・ソーシャルワークが価値や倫理に基づく営みであることを学ぶ
具体的な内容	・まずは、ソーシャルワークに強くなる！ ・あらためて・・・ソーシャルワーク・ソーシャルワーカーとは？ ・ソーシャルワークのキホン&ソーシャルワーカーのキホン ・分野や所属が違っても「ソーシャルワーク・ソーシャルワーカーとしての共通基盤」がある！ ・私たちはなぜ「コミュニティに強いソーシャルワーカー」にならなければいけないのか？ ・ソーシャルワークの「アセスメント」とは？ ・私の仕事をもっと「ソーシャルワーク」に、私自身をもっと「ソーシャルワーカー」にしたい！
講師	空閑浩人（同志社大学）



■単元2 ■「コミュニティ（地域）とは何か、そこで暮らすとはどういうことか」

時間数	120 分
単元の目標	・コミュニティ（地域）とは何かを考えてみる ・人々が暮らしを営むコミュニティ（地域）について、ソーシャルワークの視点でとらえてみる ・ソーシャルワークの視点でとらえるとはどういうことかを振り返る
具体的な内容	・コミュニティ（地域）について、具体的、実践的に考えてみる ・コミュニティ（地域）との関係を振り返ってみる ・「地域」にいても「地域」で暮らせていない人がいる？！ ・なにがそうさせているのか…ソーシャルワークの視点から考えてみる
講師 コメンテーター	野村裕美（同志社大学） 谷口郁美（滋賀県社会福祉協議会） 勝部麗子（豊中市社会福祉協議会）



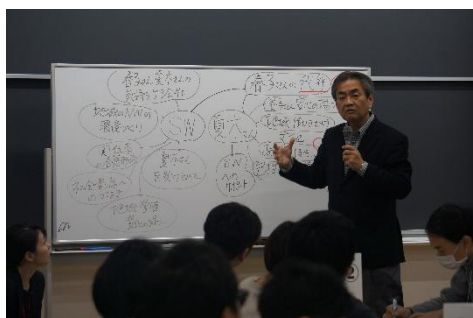
■ 単元3 ■ 「コミュニティに対するソーシャルワーカーのアセスメントとは」

時間数	165 分
単元の目標	・ ソーシャルワークにおけるアセスメントの基本を学ぶ ・ ソーシャルワークにおける地域アセスメントの全体像を学ぶ ・ 地域住民と協働し、地域生活課題を解決していくための地域アセスメントの視点を学ぶ
具体的な内容	・ あらためて…ソーシャルワークのアセスメントとは？ ・ コミュニティ（地域）の何をアセスメントするの？ ・ コミュニティ（地域）のアセスメントはこれを活用しよう！ ・ コミュニティ（地域）に関わるのは難しい？！対応策とは？
講師	京都会場：空閑浩人（同志社大学） 藤井博志（関西学院大学） 東京会場：加山弾（東洋大学） 愛知会場：加山弾（東洋大学） 中島修（文京学院大学）



■ 単元4 ■ 「地域を基盤としたソーシャルワークの全体像」

時間数	120 分
単元の目標	・ 地域生活課題の特性に対応するソーシャルワークのアプローチを学ぶ ・ 地域生活支援と地域づくりの関係を学ぶ ・ 総合相談支援体制の基本を学ぶ
具体的な内容	・ 1 日目の振り返ってみて ・ あらためて…エンパワメントとは？ ・ コミュニティ（地域）を巻き込み巻き込まれる支援とは？
講師	京都・愛知会場：藤井博志（関西学院大学） 東京会場：中島修（文京学院大学）



■ 単元5 ■ 「ネットワークと社会資源の開発」

時間数	180 分
単元の目標	・「地域共生社会」の政策動向と改正社会福祉法のポイントを踏まえる。 ・社会福祉法第4条に創設された「地域生活課題」について、複合的にアセスメントをする視点を身につける。 ・地域について、複合的な課題（複合化）と地域住民との協働（協働化）の視点から、具体的なネットワークと社会資源開発の留意点について学ぶ。
具体的な内容	・あらためて…ネットワークとは？ ・これも、あれも社会資源！視点が変われば見えてくる！ ・社会資源の開発って、なんか難しそう・・・
講師 コメンテーター	京都会場：中島修（文京学院大学） 東京会場：中島修（文京学院大学） 渡辺裕一（武蔵野大学） 愛知会場：原田正樹（日本福祉大学） 勝部麗子（豊中市社会福祉協議会）



■ 単元6 ■ 「『コミュニティに強い』ソーシャルワーカーになるために必要な力」（まとめ）

時間数	90 分
単元の目標	・2日間の学びを振り返り、気づき、理解したことを言葉にしてわかちあう ・「コミュニティに強い」ソーシャルワーカーのよりどころとなる「価値」を確認する ・よりどころとなる「価値」を基盤としてどのような力が必要かを考える ・アクションプランの作成を通じ、次につなげる準備をする
具体的な内容	・受容、共感…そして人に伝える力／発信する力／グループを組織し動かす力 ／組織や団体を経営、運営する力／財源を確保、活用する力／多機関、多職種と連携、協働、交渉する力／ソーシャルアクションをする力 ・研修での学びを実践につなげよう！ ・アクションプランを作成してみよう！ ・コミュニティに強いソーシャルワーカーになろう！
講師 コメンテーター	所めぐみ（関西大学） 坂本智代枝（大正大学） 松本すみ子（日本精神保健福祉士協会・東京国際大学）



■ 交流会 ■（愛知会場のみ）

「大名刺交換会」

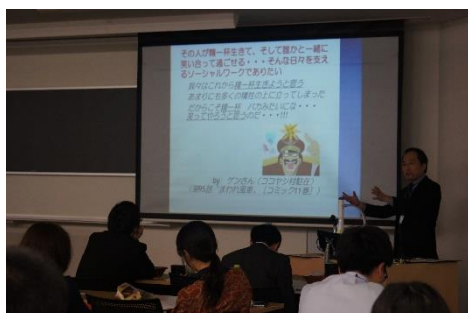
時間数	20 分
ねらい	・ 研修参加者同士の交流を図る ・ 参加者と講師（本事業委員）との交流を図る
コーディネーター	松本すみ子（日本精神保健福祉士協会・東京国際大学）



■ ランチョンセミナー ■（愛知会場のみ）

「漫画『ONE PIECE』とソーシャルワーク～誰かのために、私（ソーシャルワーカー）は「本気（マジ）」になる！！～」

時間数	40 分
ねらい	・ ソーシャルワーク、ソーシャルワーカーについてさらに理解を深める ・ 様々な切り口からソーシャルワーク、ソーシャルワーカーをとらえてみる
講師	空閑浩人（同志社大学）



8) 事前課題・事前学習・事後課題

①事前課題

下記の項目について各自様式に記入し、研修1週間前までに提出していただいた。提出された事前課題は、講師・委員間で共有し、研修内容に反映させるよう努めた。また、研修当日には福祉マップや日常圏域の地図を1部持参することを呼びかけた。

<事前学習の項目>

- ・コミュニティ（地域）のなかで、現在抱えている課題について
- ・この研修で学びたいこと、期待していることについて
- ・所属機関がある地域について（人口、面積、高齢化率、産業、文化等）

②事前学習

厚生労働省「地域力強化検討会最終とりまとめ」（平成29年9月12日）を事前に読んで研修に参加することを呼びかけた。

③事後課題

単元6「『コミュニティに強い』ソーシャルワーカーになるために必要な力（まとめ）」で作成したアクションプランの実行状況について確認をするものという位置づけで事後課題を設定した。研修終了後3か月後を目途に事務局より事後課題をメールで送付し、提出を依頼した。項目は下記の通りで、提出された課題は、講師・委員間で共有し研修内容に反映させた。

<事後学習の項目>

- ・研修を受講した後、組織内で行ったことについて
- ・研修を受講した後、地域で行ったことについて
- ・研修で良かった内容について
- ・研修に盛り込んでほしい内容について

9) 開催要項・チラシ

開催要項及びチラシを作成し、関係機関・団体を通じて頒布を行った。



3. 事業実績

本事業の達成目標は、①共通テキストと研修プログラムの開発、②現任者向けの試行的研修の実施である。その目標を達成するために、本年度は下記の事業を行い、成果を得た。

1) 共通テキストと研修プログラムの開発

①検討の流れと成果

- 昨年度の事業の成果を基に、「プログラム検討班」を中心に研修プログラムの骨子について検討した。
- 各単元に含める具体的な内容や担当講師について「事業委員会」で検討を行い、各単元を担当する講師が中心になり当日研修で使用するテキストを作成した。
- 2日間の研修が各単元で完結せずに一貫性を保てるよう、「事業委員会」において、各単元の担当講師がテキストを持ち寄り、模擬授業を行うことで各単元の内容や流れを共有した。
- 各研修の終了後に講師、委員及びファシリテーターで振り返りの時間を設け、改善点について共有を行い、次回以降の研修に反映させた。

■プログラムと進行等の改善の例■

◇京都会場→東京会場

- ・単元の時間変更（単元1と2）
- ・単元内の進め方の変更（単元2）
- ・各単元で扱う内容の整理（単元3）
- ・ファシリテーターの位置づけの変更

◇東京会場→愛知会場

- ・これまで以上に実践の事例や現任者からのコメントを多く取り入れるようにした
- ・交流会とランチョンセミナーの実施

- 各会場のテキストについては、本連盟で印刷・製本を行った。

②工夫・配慮した点

- 受講対象者は社会福祉士・精神保健福祉士国家資格取得後5年前後の実務経験を有する者であるため、理論ありきの講義ではなく、これまでの実践をアウトプットし整理することができるよう、演習を中心に展開した。
- 大学教員・研究者と現任者がペアになり役割分担をしながら単元を進めた。
- 研修内容全体を多様な視点からモニタリングするために、研修当日に講師を担当しない委員についてもできるだけ研修への参加するよう努めた。
- テキストの作成にあたっては、本事業の連携・協力団体と共通で利用できる教材にするように心がけた。
- 社会福祉士養成教育カリキュラムの見直しが検討されていることから、共通テキスト及び研修プログラムを養成教育に落とし込むことを想定して検討を行った。

2) 現任者向けの研修の実施

①参加者数・修了者数等 ※修了者は2日間出席した者

■全体■

参加者数：246名 修了者数：236名 見学者：11名

ファシリテーター：延べ38名

■京都■

参加者数：87名 修了者数：83名 見学者：0名 ファシリテーター：12名

委員（講師を含む）：14名

■東京■

参加者数：86名 修了者数：82名 見学者：6名 ファシリテーター：13名

委員（講師を含む）：15名

■愛知■

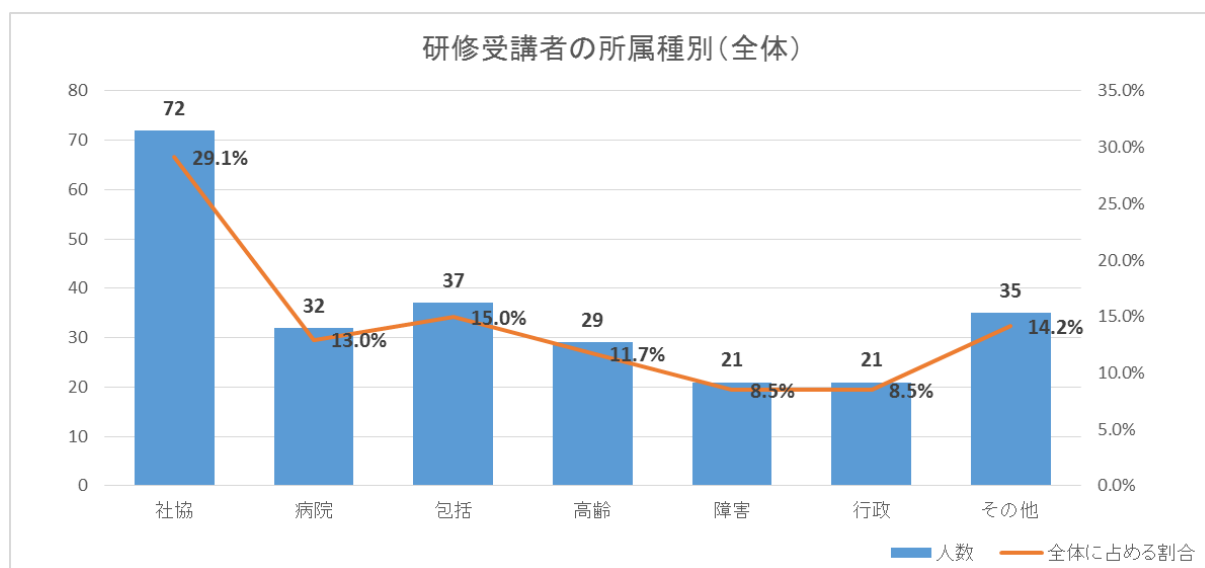
参加者数：73名 修了者数：71名 見学者：5名 ファシリテーター：13名

委員（講師を含む）：15名

②受講者属性

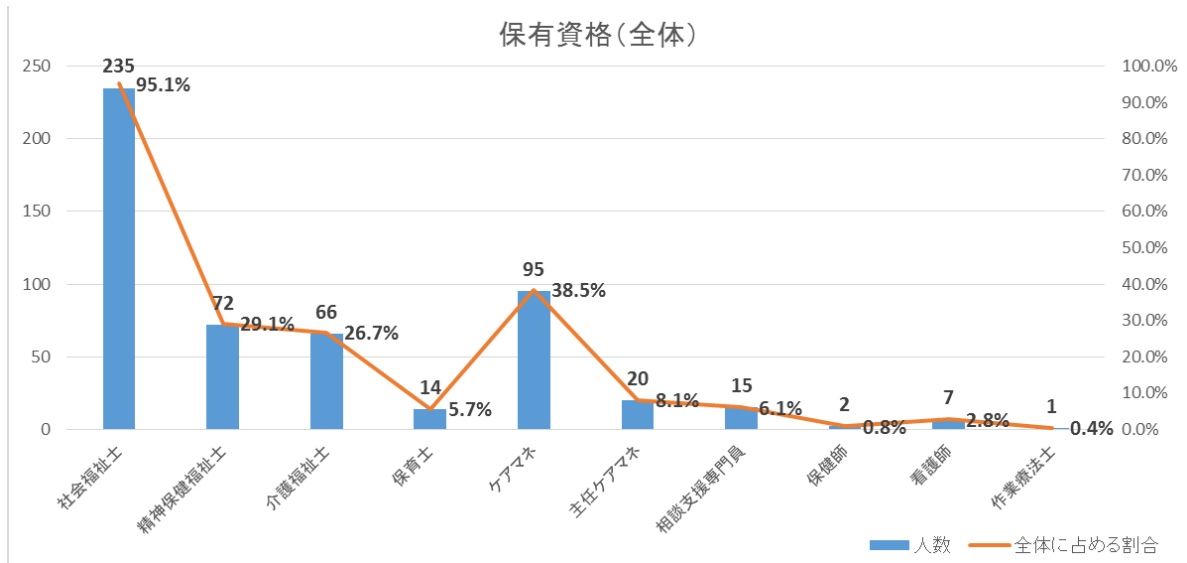
■所属■

- ・ 社会福祉協議会（29.1%）、地域包括支援センター（15.0%）、病院（13.0%）の順に多かった。
- ・ なお、「高齢」には特別養護老人ホーム、居宅介護支援事業所等が、「障害」には地域生活支援センター、相談支援事業所、就労支援事業所等が、「行政」には役所、教育委員会、保健所などが、「その他」にはNPO法人、母子生活支援施設、独立型社会福祉士事務所、大学等が含まれている。



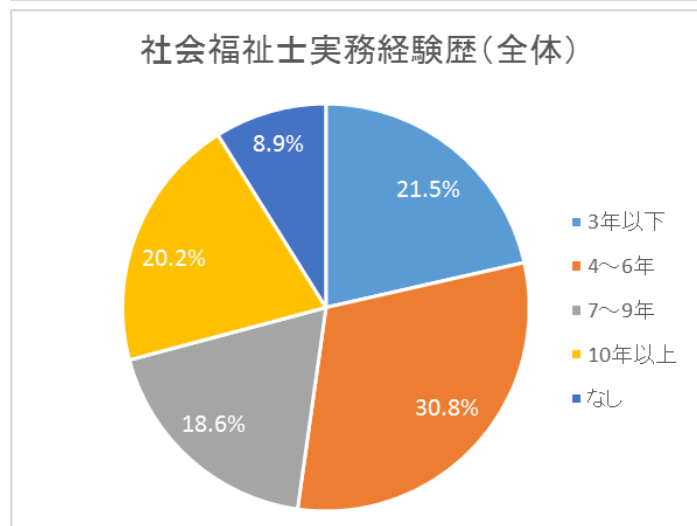
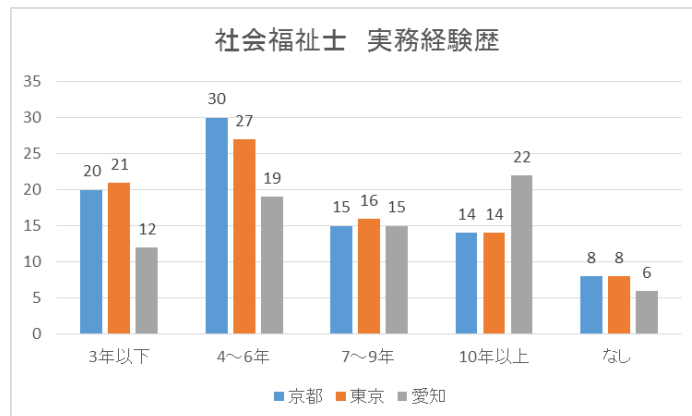
■ 保有資格（複数回答） ■

- ・ 社会福祉士（95.1%）、ケアマネジャー（38.5%）、精神保健福祉士（29.1%）の順に多かった。



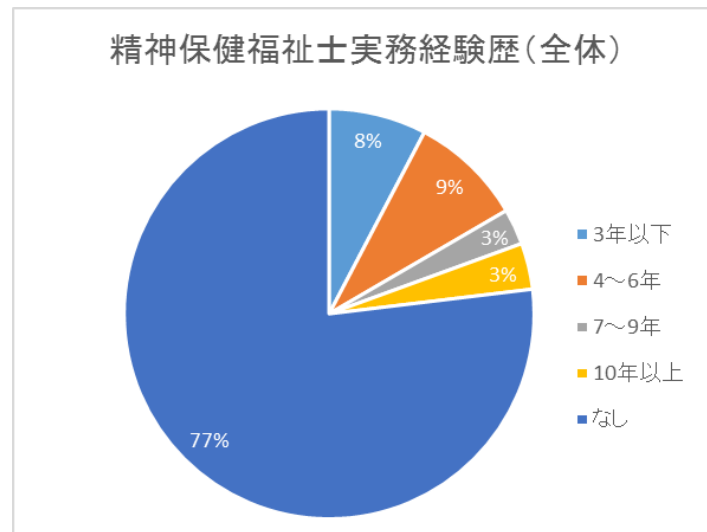
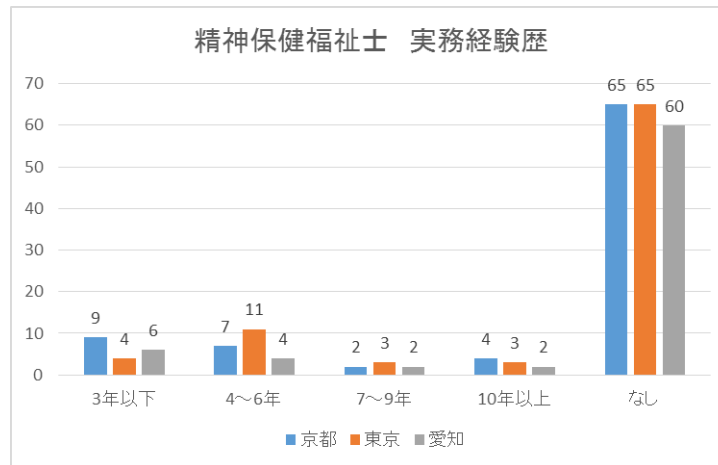
■ 社会福祉士の実務経験歴 ■

- ・ 受講対象としていた4～6年が30.8%と最も多かったが、10年以上の経験を有する者も20.2%もいた。



■精神保健福祉士の実務経験歴■

- ・全体として精神保健福祉士の実務経験を有していない者が多かった。



③広報

- 広報にあたっては、委員・協力員が所属する組織・団体（全国社会福祉協議会・都道府県社会福祉協議会・日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会など）に協力を依頼した。
- 委員会で「各会場で定員を満たす」という目標を定め、各組織・団体の会員や開催する研修会やイベント等でチラシを頒布し、メーリングリスト等の媒体も活用しながら広報を行った。また、本連盟の Facebook や twitter を活用し、研修の写真や様子について積極的に発信を行った。

■チラシの頒布先と部数■

- ・日本社会福祉士会 会員他（約 45,000 部）
- ・日本精神保健福祉士協会 会員他（約 12,000 部）
- ・日本医療社会福祉協会 会員他（約 6,000 部）
- ・全国社会福祉協議会（約 4,000 部）

- ・都道府県社会福祉協議会（東京・滋賀等）（約 1,000 部） 他

■雑誌・メールマガジン等での広報■

- ・『月刊福祉（2017 年 11 月号）』＜infomation＞pp.102-103
- ・『NORMA 社協情報 No.311（2017 年 10・11 月号）』インフォメーション p.15
- ・「福祉新聞」2017 年 9 月 25 日「ふくしクリップ」
- ・メールニュース社協版（社会福祉法人 全国社会福祉協議会地域福祉部／全国ボランティア・市民活動振興センター）
第 17 号（通算 664）2017 年 7 月 25 日 第 19 号（通算 666）2017 年 8 月 8 日
第 24 号（通算 671）2017 年 9 月 12 日 第 26 号（通算 673）2017 年 9 月 26 日
- ・日本精神保健福祉士協会構成員メールマガジン vol.038 2017 年 8 月 4 日
- ・NPO 法人 SocialchangeAgency メールマガジン vol.179 2017 年 7 月 30 日

④ファシリテーター

- グループ討議のサポートと研修の評価者としてファシリテーターを各会場で配置した。
- ファシリテーターには、事前にテキストや受講者の属性、各単元の目標や進め方等を記載したマニュアルを送付し、研修の主旨や各単元の講義内容等について共有を行った。
（愛知会場のみ、研修開催前に事前説明会を行った。）
- ファシリテーターマニュアルは、研修終了後に出た意見を反映さえるなどして随時改良を行った。
- ファシリテーターの募集については、全国社会福祉協議会、日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会に協力を依頼した。



■ファシリテーターの所属■

＜京都会場＞ 12 名

京都社会福祉士会、京都府社会福祉協議会、兵庫県社会福祉協議会、滋賀県社会福祉協議会、日本精神保健福祉士協会

＜東京会場＞ 13 名

全国社会福祉協議会、東京都社会福祉協議会、埼玉県社会福祉協議会、神奈川県社会福祉協議会、川崎市社会福祉協議会、日本精神保健福祉士協会、日本福祉大学

＜愛知会場＞ 13 名

名古屋市社会福祉協議会、刈谷市社会福祉協議会、長久手市社会福祉協議会、三重県社会福祉協議会、静岡県社会福祉協議会、日本精神保健福祉士協会、日本福祉大学

■参加したファシリテーターの主な感想・意見■

＜研修・プログラムについて＞

- ・実務経験 5～6 年の方を対象としていることから、学習から実践の只中にいる人が、自らの実践を俯瞰して見る機会となり、日常の実践を意味づけし、新たな目標を明確にすることができると感じた。
- ・地域を基盤とした生活・福祉課題を、様々な職種や機関で解決するための、共通基盤をつくっていく研修であると感じた。
- ・自分たちの仕事が「ソーシャル」であるための視点を体系的に確認できるプログラムであったと思う。
- ・いかに現場に持ち帰って実践できるか、教科書的なことでなく、自分の言葉で、自分の実践で考えるプログラムは大変参考になった。
- ・各単元がつながっており、とても工夫され、内容も練られたものなので理解が進んだ。

＜講義内容について＞

- ・演習が多くアウトプットの機会となってよいと思った。
- ・所属機関が異なる方々がグループで演習を行うので、「コミュニティ」、「地域」など、言葉の定義についての共通認識を初めの段階で持つか、随時繰り返すなどがよいのではと感じた。
- ・ワークの時間等を明確に伝えた方がよいと思う。
- ・2 名以上の講師が単元を担うことで、講義と演習のバランスとコメントでの相補が有効になされていたと感じる。受講生が研修内容をより受け止めやすくなっていた点が良かった。
- ・実践者の視点からのコメントが得られたことで、現場実践への理解が深まったと思われる。
- ・社会資源を見る視点を学んだが、社会資源の開発、地域の活動を支援するといった内容がなかったと思う。
- ・単元 1 と 2 で出てきた内容が、あとでの単元できちんと出てくるのが良かった。
- ・各演習での個別の記入時間は短めに設定して、グループで話し合う時間を多めにとる方がよいと思う。
- ・マクロ視点の中で地域福祉計画をいかに受講者に伝えるのか、難しいが、重要な視点なので、もう少し触れてほしいと思った。
- ・地域アセスメントの単元は、もう少し丁寧に説明しても良いと思った。

<ファシリテーターについて>

- ・ファシリテーターの役割について共通認識が必要だったと思う。
- ・ファシリテーターの役割が単元で変わる場合、あらかじめその内容と意図を参加者に説明する等で共通認識することが必要だと感じた。
- ・各グループにファシリテーターを配置することは効果的である。一方、ファシリテーターにとっては、事例や展開など、事前準備について参加者とほぼ同じ状況で研修に臨むことになったことで、ファシリテーターの理解が十分でないまま研修がすすめられることになった。進行や事例について事前に示していただくだけで、準備の時間はある程度確保されたのではないかとと思う。
- ・ファシリが介入しすぎない形で、グループが「チーム」になっていく様子を見ることができた。

<受講者について>

- ・研修への参加意欲が高く、ワークに主体的にかかわり、学びの姿勢ができていたので、ファシリとして進めやすかった。
- ・グループ内に自費で参加している方が数名いて関心の高さが伺えた。
- ・分野や所属が多様であるとともに、参加者のモチベーション、意欲等が高く、お互いを刺激・感化するピア効果が高い研修だと感じた。

<その他>

- ・県社協職員として、研修企画者として参考となる点が多くあった。
- ・やりっぱなしではなく、フォローアップの仕組みを設ける必要性も感じた。

⑤全国展開に向けた講師候補者の育成

- 今後、各ブロック・都道府県単位で継続して本研修が実施できるよう、研修会場において協力者を募った。
- 来年度は、各ブロック・都道府県で核となる人材を育成するために、講師養成研修（集合研修）を開催する予定である。

⑥受講者アンケート

■ 回答者数と回収率 ■

会場	回答者数	回収率
京都	85	95.5%
東京	80	89.8%
愛知	80	87.1%

■ 会場別の評価と感想 ■ （5段階評価）

<京都会場>

全体的な内容について：4.5

◇自由記述（主な意見）◇

非常に良かった	・「自分は事業所の支援員ではあるけど、ソーシャルワーカーになれていない」という意識を 7～8 年ずっと持っていましたが、その理由がかなり明確になった。 ・ソーシャルワーカーとしてもっと頑張ろうと思える研修だった。 ・ソーシャルワーカーとは本来こんなに面白い仕事だったのかと知る、気づくことができた。
良かった	・実践を積んだうえで、ソーシャルワークの話を聞くことでより理解が深まっていたように思う。 ・個別支援が多い実践者でも参加しやすく、学びやすい内容であった。 ・地域での支援とは特別なことをするわけではないことに気づき、肩の力が抜けた。小さなところからコツコツしていきたい。
普通	・全体の理解が2日間で難しい。 ・テキストを読む時間が長く、集中力が切れてしまった。

<東京会場>

全体的な内容について：4.4

◇自由記述（主な意見）◇

非常に良かった	・コミュニティと言うと、難しい問題・課題が大きすぎると感じていましたが、日頃の業務がつながってくるのだと学ぶことができよかった。 ・どの領域・機関にいてもソーシャルワーカーはコミュニティに強いソーシャルワーカーにならないといけないのだと感じた。 ・「我が事・丸ごと」は、本当にできるのかと疑っていたが、もしかしてすごく日々の仕事が楽しくなってくるのではないかなと思えました。 ・研修全体を貫くソーシャルワークの倫理や価値を意識することができた。 ・地域の中での自分の立ち位置探しのために参加して、さらに混沌としたが、パワーと道の先に灯がたしかにみえてきた。
良かった	・全講義がきちんとつながって考えられ、まとまりのある内容だったのだと最後に実感した。 ・他の受講者の方の視点を知ることができ、又、事例を通してじっくりとアプローチできたことで、自分に不足しているものを確認することができた。
あまり良く なかった	・1日目と2日目の結びつきが少ない感じがした ・もう少し自分の実践につながるような研修であってほしかった。

<愛知会場>

全体的な内容について：4.7

◇自由記述（主な意見）◇

非常に良かった	・コミュニティに強いソーシャルワーカーについて、基本となる「ソーシャルワーク」「コミュニティ」から丁寧に学ぶことができた。 ・コミュニティとは、本人が安心できる場所で、ソーシャルワーカーはその支援に力を注ぐのだと理解できたから。 ・学ぶことすべて新鮮でヒントがあり、猛省することも多かった2日間だった。 ・演習を通して多角的な考えを知ることができ、自分の盲点を知ることができた。
良かった	・自分の仕事を地域というキーワードから見直すきっかけとなった。 ・演習中心で、自ら考える場面が多かった。
あまり良くなかった	・課題が大きすぎて、何から行ったら良いか、わからなくなった。

⑦事前課題

■提出件数と提出率■

会場	提出件数	提出率
京都	85	97.7%
東京	86	100%
愛知	73	100%

■コミュニティ・地域のなかで、現在抱えている課題について（抜粋）■

- ・連携機関に偏りが生じており、社会資源の開発や開拓に全く取り組めていない
- ・地域住民との関わりがない単身者向けマンションに住んでいる独居高齢者への支援
- ・地域へのアプローチの仕方、地域の課題の見つけ方
- ・住民主体の地域づくり、支え合いづくりを高齢者施設としてどう取り組んでいけばよいか
- ・過疎化により生活に困難を感じている人が増加している中での支え合いの仕組みづくり
- ・施設機関が地域住民に知られるためにはどうしたらよいか
- ・異なる領域との連携、他分野多職種との関わり方
- ・災害時の支え合いの仕組みづくり
- ・ひきこもりやごみ屋敷、児童虐待などに対する支援方法
- ・無関心層へのアプローチの仕方

■この研修で学びたいこと、期待していることについて（抜粋）■

- ・ソーシャルワーカーについて再度学び直して実践に活かしたい
- ・地域づくりのためにソーシャルワークは有効であることはわかっているが、具体的にどうしたらよいのかを学びたい
- ・コミュニティの概念、アセスメントの方法等について専門職の視点から学び直したい
- ・地域のつながりを作りながら個人を支える方法を学びたい
- ・自分の地域の良いところに改めて気づき、発信できるようになりたい

- ・「支えられる側」であった者が「支える側」に変化するためのきっかけ作りの方法
- ・国の指針を読むだけでは理想論で終わってしまうので、それを自分の中で消化して行動につながるレベルまで理解を深めたい
- ・地域共生社会の実現に向けソーシャルワーカーとしてどのように地域に向き合っていけば良いのかを学びたい
- ・地域で認知され、必要とされるソーシャルワーカーになるために地域へ出ていく方法について学びたい
- ・全国で同じ思いをもつソーシャルワーカーとつながりたい

⑧ 事後課題

■ 提出件数と回収率 ■

会場	提出件数	提出率
京都	57	65.5%
東京	<u>59</u>	<u>68.6%</u>
愛知	平成 30 年 5 月末に連絡予定	

■ 研修終了後、組織の中で行ったことについて（抜粋） ■

＜ありがたい（目指す）姿＞

- ①施設で暮らす高齢者が施設で暮らしていながらも「地域（自宅）で暮らし続けている」という感覚で生活できる施設を目指したい
- ②がんばりすぎず諦めない。「気になる」をそのままにしない。
- ③支援の共通基盤としてソーシャルワークを位置づけたい

＜実行するためにどのような計画を立て、実行したか＞

- ①施設のスタッフに「なぜ施設が地域に根付く必要があるのか？」を理解してもらえるように会議で伝える。地域の行事やイベントに入居者が出向けるようにする。
- ②「気になる」をそのままにしないよう、その日のうちに確認・相談するようにした。終礼ミーティングを導入した。
- ③社会福祉士の実習受け入れのための指導マニュアルにソーシャルワークの要素を取り入れる。

＜現時点での達成具合・達成までの課題点＞

- ①スタッフの理解は徐々に進んでいる。入居者の地域の行事やイベントへの参加は、少人数ずつお連れしている。入居者と地域から高評価を得ている。
- ②「気になる」を共有できるようになったが、ミーティングの継続性が難しい。
- ③取り組み状況は 30%程度。実行するために施設長会議にも提案していきたい。

■ 研修終了後、地域で行ったことについて（抜粋） ■

＜ありがたい（目指す）姿＞

- ①地域に巻き込まれるソーシャルワーカー
- ②ストレングス視点で地域を見て、押し付けにならず地域と対話するソーシャルワーカー
- ③地区社会福祉士会で「ソーシャルワーカー養成講座」を開催したい

＜実行するためにどのような計画を立て、実行したか＞

- ①地域課題を解決するためにつながりをも強めていく必要のある機関に対して、ネットワーク構築を行い、早期相談や早期支援に結びつくようにする。
- ②地域の強みを書き出し組織内で共有する。地域の防災訓練を通して社会資源とつながりをもってもらい取り組みを行う。
- ③プロジェクトチームを結成し、実施に向けて企画・検討をする。

＜現時点での達成具合・達成までの課題点＞

- ①不動産会社に気になる高齢者がいたら地域包括支援センターに相談するよう依頼をした。
まだまだ地域包括支援センター自体を知らない方も多いので、引き続き啓発活動が必要。
- ②地域住民から「障害者と交流したい」という相談があったことで一つ目標を達成することができた。
- ③役員会に提案をし、プロジェクトチームを結成するためにメンバーの選定を行う。

Ⅲ. まとめ（次年度に向けて）

1. 本年度の成果と課題

1) 共通テキストと研修プログラムの成果

- 研修事業（コソ研）では、以下の方法で実施した
 - ・テキスト編集と研修プログラムの検討プロセス各教員の授業計画（内容、方法含む）を提出し、互いに共有しながら討議を行った。授業計画の相互評価を行い、各々の模擬授業から互いの授業方法を相互確認・評価しつつ、コソ研の研修プログラム指導案及び研修用テキストを作成した。
- ・平成 29 年度のテキストは、研修で実際に使用しながら内容を改善・修正していったため、いわゆる市販用の製本は行っていないが、内容としてはほぼ完成に近づけることができた。

2) 現任者向けの研修の成果

- 受講者同士が自身の取組について説明し合い、学び合いの時間を確保することで、それぞれの今後の実践に活かすことができた。
- 受講者と教員とでは、受講者の先進的な事例について教員が学び、うまくいっていない事例については、教員が助言をしつつ、双方の学びが促された。
- 教員同士では、お互いの教授方法や使用教材について相互確認・評価が促され、効果的な研修方法の獲得に資することができた。また、演習形式のプログラムでは、開催地近郊の社会福祉協議会や専門職団体等からファシリテーターを募り、当該地域で今後開催する研修の講師候補者を確保することができた。
- 総じて、現任者（受講者）に対し、コミュニティの理解やコミュニティで生じる生活課題への接近方法、解決の手法を教授することができた。

3) 今後の課題

- 全国各地で継続して本研修内容を実施するための方策を検討する必要がある。
- 本事業で協力している共催団体やそれ以外の団体（社会福祉法人経営者協議会等）との連携を強化し、当該地域で開催する実施主体の形成をはかっていく必要がある。
- 社会福祉士・精神保健福祉士等のソーシャルワーク専門職とともに、非専門職であるが当該地域においてリーダー的役割を果たす住民等（民生委員等）も参画できるような機会の創出を検討することも必要である。
- 現任者が本研修内容をはじめとするプログラムの教授法を獲得し、全国各地にプログラム内容を波及させていくための具体的な戦略を検討する必要がある。
- 社会福祉士・精神保健福祉士等の養成に携わる教員の資質向上に向けた研修にも活用できると考えられ、本事業の内容をどのように養成教育内容に反映させるか検討する必要がある。
- 現在使用している研修用テキストを、市販できる内容にするため、PPT 等資料の文字かとともに、全国各地でこの事業を展開する際に使用しやすいテキストを編集し、発行することが必要である。

2. 次年度の検討内容とスケジュール

1) 次年度（最終年度）の具体的な検討事項

2) 委員会及び研修スケジュール予定

①事業委員会

	日にち
1	2018年5月5日
2	" 8月
3	" 11月
4	2019年2月

②プログラム検討班

	日にち
1	2018年5月5日
2	" 8月
3	" 10月
4	

③テキスト編集

	日にち
1	2018年5月5日
2	" 6月
3	" 7月
4	" 8月

④「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修（コソ研）」

	日にち	場所
1	2018年10月13日・14日	東北（仙台予定）
2	2018年11月10日・11日	中国四国（広島予定）
3	2018年9月16日・17日	九州（熊本予定）

⑤研修講師養成研修

	日にち	場所
1	2018年8月13日	ソ教連研修室（東京）

IV. 參考資料

おわりに

事業2カ年度目である本年度は、「コミュニティに強いソーシャルワーカーを養成する研修（コソ研）」の試行に向け、研修プログラムと共通テキストの検討を行い、実際に全国3会場で研修を実施することができた。実施にあたっては、専門職団体、全国社会福祉協議会をはじめ、多くの関係団体に広報・当日の運営等にご協力をいただいた。ここに深く感謝申し上げるとともに、引き続き、本事業へのご協力をお願い申し上げる次第である。

人口減少・少子高齢化の進行、家族や地域の変容、雇用環境の変化などにより、子どもから高齢者まであらゆる世代において、生活のしづらさを抱えながら暮らしている人たちが増加している。そのような時代に生きるソーシャルワーク専門職である社会福祉士・精神保健福祉士には、多様化・複雑化するあらゆる課題に対応するために、多職種・多機関と連携するとともにその地域で暮らす住民と協働していくことが求められている。

本研修では、あらゆる組織・機関でソーシャルワーカーとして日々実践を行っている方々に参加いただいた。受講者からは各会場で高い評価を得ることができ、企画者が伝えたい内容と現任者が求めている内容がほぼ一致しているという確信を得た。今後は、受講者アンケートや提出された事後課題でいただいた意見を研修プログラムや共通テキストに反映することで、より良いものにし、全国展開することができるよう、引き続き、検討を行っていきたい。

研修を受講したソーシャルワーカーたちが「コミュニティに強いソーシャルワーカー」になる！と前向きな気持ちになり、そして、その思いが組織やその地域、さらには社会を変える原動力になることができるよう、TEAM★コソ研として、役割を果たしていきたいと考えている次第である。

平成30年3月

一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟

地域共生社会の創造に向けたコミュニティソーシャルワーカー養成研修の基盤構築事業
報告書

＜平成 29 年度 赤い羽根福祉基金助成事業＞
平成 30（2018）年 3 月 31 日発行

一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟

〒108-0075 東京都港区港南 4-7-8 都漁連水産会館 5 階

電話：03-5495-7242 FAX：03-5495-7219

E-mail：jimukyoku@jaswe.jp Website：www.jaswe.jp

社会を良くするたしかな一歩



赤い羽根
福祉基金

本事業は、社会福祉法人中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」の助成を受け、実施しました